

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2193200041		
法人名	社会福祉法人 新生会		
事業所名	グループホーム もやいの家瑞穂		
所在地	岐阜県瑞穂市本田2050番地1		
自己評価作成日	令和5年2月1日	評価結果市町村受理日	令和5年4月19日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action=kouhyou_detail_022_kani=true&ligvsysCd=2193200041-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター びーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	令和5年3月6日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

2ユニットの間仕切りを最小限にする事で、利用者が選択できる小さなリビング等の環境を複数設けている。天井高も工夫し日本家屋にならった1, 8mと低い部分を設える事で家庭的な雰囲気を出し1つの空間が集団的な支援になる事を防いでいる。

コロナ禍で活動量が低下しているため、レクで体操を多く取り入れたり、ホール内を散歩する等下肢筋力低下予防に努めた。季節の行事を行ったり、行事食を提供し季節の感覚を感じてもらえるように工夫した。また、コロナ感染症対策をしっかり行い、クラスター発生防止にも努めた。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

運営推進会議は感染状況をみながら、臨機応変に書面または対面にて実施している。子ども食堂や駄菓子屋は感染予防対策をした上で実施している。生活リズムを整えられるよう、ラジオ体操を日課にし、日曜の朝はパン食にして曜日の理解に繋げ、決まった時間に経や祈りの音声を流すなど様々な工夫をしている。花壇の手入れは利用者と共に行う事で外気浴にもなり、育った花を切り花にし、至る所に飾るなど季節感あふれる室内になっている。技能実習生を受け入れており、サポートする事が職員の学びにも繋がっている。仕事にやりがいを感じている職員も多く、現状で満足することなくステップアップに取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当するものに○印		項 目		取 り 組 み の 成 果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

自己 外部	項 目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入職時の研修で体験実習、障害体験、また、スキルアップ研修を通じ、法人の理念を学び、相手の立場に立った介護を職員全員が意識して実践している。毎月、施設長、管理者を交えた部門会議や職員会議で全職員と理念を共有するよう努めている。	目につき易い玄関やフロアに理念を掲げ、毎日確認できるようにしている。入職時研修やスキルアップ研修時に、法人理念を周知させ、意識化を図っている。職員は、ネームプレートに理念を基にした自分のケア目標を書き、実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍で地域との交流は中止しているが、今年度、RUN伴＋(PLUS)みずほが再開され、もやいの家はスタートイベント会場となった。ご利用者も、2階からスタートの応援に参加することができた。	RUN伴＋(PLUS)みずほが3年ぶりに再開され、利用者も2階から応援に参加している。また、地域の子ども達を対象にした駄菓子屋を地域交流ホールで開催し、盛況な様子がケーブルテレビで放映された。自治会、法人、行政が協力し地域がつながる活動に取り組んでいる。	前回の目標であった「地域福祉の拠点づくり」は、コロナ感染状況を見ながら徐々に取り組んでいる。今後も継続し、利用者と共に地域交流を行いながら、福祉のまちづくりの発展に期待したい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	2018年より、地域住民、他事業所、行政、社協、包括と協働しながら、RUN伴＋(PLUS)みずほ(認知症の啓蒙、啓発活動)を実施。コロナの影響により2年間中止していたが、今年度は感染症対策に留意し、駄菓子屋交流会と同時に開催することができた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議ではご利用者の生活状況、変化を報告しながら意見交換を行い、コロナ禍で開催できない時は報告書を郵送し、意見の集約を行う事で開催に代えさせて頂いている。意見や質問等については、次の開催時に説明を行っている。	2ヵ月毎の運営推進会議は、運営状況や利用者の活動、総合事業活動等を多くの写真を活用して分かり易く報告している。コロナ禍で対面での開催が難しい時は書面開催としている。毎回、ヒヤリハットと事故報告の分析結果、原因等を開示し、運営の透明性に努めている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市役所、地域包括支援センター、広域連合職員と運営推進会議にて、利用者の状況報告をしている。平成24年4月より、介護相談員が1/M来所し、利用者の声を聞いている。第3者の意見を聞き、サービスの質の向上を目指している。現在コロナ感染症により、来訪は中止している。	運営推進会議には市担当部署、地域包括支援センター、広域連合から出席を得、日頃から状況に応じて関係機関と連絡を取り合っている。現在、研修や意見交換等はオンラインで行なわれることも多く、会場への移動がない為、積極的に参加することが出来ている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	瑞穂全体会議や研修などで、身体拘束や言葉による拘束(スピーチロック)を学び、日中は玄関の施錠はせず、家族等にも説明し、合意しケアに取り組んでいる。	出入口は施錠せず、扉に鈴を付け、鈴の音で出入りを確認している。エレベーターは利用者も使用することができるので、常に職員は見守りを怠らないよう努めている。外出する利用者を制するのではなく、理由を尋ねて思いに寄り添いながら安全な支援につなげている。拘束しない事で起きるヒヤリハットや事故について、原因を分析し、改善に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待について、正しい理解ができるように研修にて学び、毎日の申し送りや部署会議でも話し合いをし取り組んでいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	認知症実践者研修、認知症実践者リーダー研修の修了者より、制度について部署会議にて共有。家族や外部からの相談に対応できるように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	見学、事前訪問、契約と十分に時間を取り、家族の不安・疑問にも分かりやすく説明している。改定がある場合も、担当者会議や電話にて、家族に納得していただき、了承を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関に意見箱を設置している。また、担当者会議の際に意見や要望を伺うようにしている。職員は日頃から家族に生活の状況を伝え、話しやすい雰囲気作りを、心掛けて対応している。	コロナ禍以前は、家族の集いに利用者の様子を映像で報告し好評を得ていた。現在は、利用者との面会はリモートで実施している。衣服交換や物品の補充、受診同行時には、家族の来訪があり、玄関先で意見を聞いている。外部評価結果は玄関にて開示している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	管理者やリーダー職員は部署会議会議や面談の時はもちろんのこと日常的に職員の意見や思いを聞くように努めている。日々の申し送りの時間を活用して職員同士意見交換し、利用者の立場で物事を考え、チームで合意し実践しながら運営に反映させている。	管理者も職員と共にシフトで現場に入り、常に職員の意見を聞くよう努めている。コロナ禍で外部研修は減少しているため、内部研修の充実を図っている。現場職員の裁量で、出来る事や事案に応じた対応を行い、管理者につなげながら運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年度初めと年末に定期面談を行い、勤務体制の確認や日頃の思いや意見を聴き、話し合い意欲を持って働ける環境作りをしている。また、一人ひとりが年度末にチャレンジシート、自己分析を行い、振り返る機会を設けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	スキルアップ研修(新人、中堅、リーダー)外部、法人内の研修の案内を伝え、参加する機会を設けている。日勤リーダーや部署会議での司会など、個別の育成に努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	コロナ禍で積極的な交流はできていないが、すでに事業者間のネットワークは形成されている為コロナが落ち着いた時に再開していきたい。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前訪問や家族、入居前に利用されているサービス事業所や、病院への聞き取りにより情報収集を行う。本人の様子と併せて、困りごとや好きなことを知り、情報共有し、支援展開していくよう努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	事前訪問や入居オリエンテーションにより、家族の思いや困りごとを聞き取り、感じ取る事ができるよう心掛けている。 思い込みで支援するのではなく、細目にコミュニケーションを図るよう努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	事前情報と、本人の実際の様子から、食事や歩行状態等の生活上で重要度の高いものを優先的に必要なアセスメントを検討し、各専門職と連携して、より良いケアや福祉用具を提供していけるよう努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	事前情報をもとに、本人の強みや得意なこと、好きなことを見つけ出し、居場所作りや生活の楽しみを感じていただけるよう支援している。その中で集団で過ごす方が好きか、個人、小人数で過ごす方が好きかも把握し、安心して過ごせる場所作りに努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍だからこそ、家族との関係づくりや、コミュニケーションを密に行い、日々の受診に外出された際や、物品依頼の際に、日常の様子を伝えたり、日々の様子の写真を送る事により、安心して頂けるよう努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍前に、普通に行っていたデイサービスとの合同レクリエーションや外部ボランティアとの時間を設けられなくなったが、ズームでの開催を試みたり、家族とはWeb面会や窓越し面会を行うことにより、互いに寂しい思いが少しでも埋められるように工夫した。	併設デイサービスから移行した利用者にとって、デイの利用者とは馴染みの関係にあり、自然な形でつきあいが継続されている。顔見知りとなったボランティアとの再会も楽しみにしている。地域行事を法人内で開催することで、認知症に対する偏見の払拭に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	1フロア2ユニットの特性を活かして良い雰囲気であったり、共通点のある利用者同士でより良い関係を築く事ができるグルーピングを検討している。 日内変動やその日によっても気の合う利用者は変わってくる為、常時検討、介入を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	今年度も他界者や入院された方がおられたが、入院後も様子を尋ねたり、困りごとがあれば相談・調整の支援をしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常の会話の中から本人の思いや意向が読み取れる事も多い為、その思いをキャッチできるようにコミュニケーションを図っている。言葉にする事が難しい方でも表情や様子から読み取る事ができる為、現場、家族、専門職と共有してケアを検討して支援に繋げている。	入居時のアセスメント情報や、日々の会話や表情、つぶやきなどを記録に残し、職員間で共有しながらケアにつなげている。レクリエーションへの参加の可否やティータイムの飲み物など、利用者が選択しやすい声掛けをすることで、利用者の思いと意向を確認している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前に家族から生活歴、好きな事、嫌いな事、得意な事について詳しく聞き取りを行い、また入居前に利用していたサービスのケアマネジャー等からの情報を職員間で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	得意な事、好きな事であってもその日の状態によって変動する事を知り、状態に合わせてケアが提供できるように常時様子観察に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各担当者がモニタリング評価を行い、部署会議で意見交換や方向性を話し合い、次の介護計画に繋げている。また、状況に応じて担当者会議を行い、家族と、意向確認や情報共有しながら、介護計画に反映している。	各担当者が介護計画の実践状況を、記録データから分析している。モニタリング評価を基に職員会議で介護計画を見直し、次の計画につなげる一連のPDCAプロセスに沿って、介護計画を作成している。担当者会議への家族参加は、コロナ禍で自粛している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケアプランに基づいてケアを行い、気づきや変化がある時は記録に残し、職員間で共有している。情報をもとにケアの提供、介護計画の見直しを行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	受診や受薬等家族が対応できない場合は職員が対応している。生活を送る上で出てくる身の回りの出来事に対して家族と相談しながら、サポートできるように努めている。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ感染症のため地域資源の活用が難しいが、コロナが落ち着いたなら、以前と同じように、NPO法人が運営するカフェ等にも出かけていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人のかかりつけ医による往診が継続できるように支援している。かかりつけ医の往診が難しい場合は家族と相談しながら、必要に応じて事業所の協力医に変更を行い、適切な医療が受けられるように努めている。	従前のかかりつけ医は、利用者の安心感に繋がる為、継続を勧めているが、往診がない場合や家族同行も困難な時には、協力医への変更にも対応し、適切な医療を受けられるよう支援している。コロナ陽性者は出たが、万全を尽くし感染拡大には至らなかった。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職員が日々利用者の様子観察を行い、併設のデイサービスの看護師や同法人特別養護老人ホーム看護師、月2回訪問される訪問看護師に随時報告、相談、急変時にも対応できる体制をとっている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	スムーズな治療ができるように、利用者の基礎疾患、服薬状況、また、入院前の暮らしの情報を提供している。入院中は定期的に家族や医療機関に連絡して、利用者の状態の把握に努めている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	契約時に、終末期の在り方について家族の意向を確認している。また状態の変化時にも家族に再度意向を確認し、主治医、看護師を交えて担当者会議を行い、事業所で出来る事、できない事を確認しながら、その方らしい終末をチームで支援している。	契約時に、終末期の対応や延命措置について説明し、家族の意向を聞いている。コロナ禍での看取りがあったが、職員のチームケアで支援し、エンゼルケアも行っている。急変時の救急搬送についても、家族に確認している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	会議で毎年救急法の勉強会を実施し、ロールプレイング等を行い実践できるようにしている。マニュアルを作成し常に緊急対応ができるように努めている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の防災訓練を実施し、全職員が初動動作が取れるように訓練している。緊急通報装置も適切に使用できるようにマニュアルの整備、及び訓練を行っている。地域連携協定を結び、他施設とも緊急時の協力体制を整えている。	災害マニュアルを整備し、2階から利用者が混乱なく安全に移動できるよう訓練を行い、緊急通報も全職員が対応可能にしている。法人エリア内の特養が備蓄品を一括で管理し、BCP計画で連携を図りながら、地域と協力体制を築いている。	

自己 外部	項目	自己評価	外部評価		
		実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の自己決定を尊重し、また自尊心を損なわないように、言葉遣いや声のトーンに気を付けている。毎月の接遇チェックシートで自己の振り返りを行っている。	法人独自の「しんせい語録」が介護のバイブルとして職員に浸透しており、利用者の人格尊重を基本にしたケアに取り組んでいる。職員一人ひとりがマニュアルや接遇チェックシートでケアを振り返り、自己への意識付けに努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活の中で自身で選んでいただけるような声掛けを行っている。意思表示が難しい場合でも、表情や反応から汲み取り希望が叶うように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりのその日の状態に合わせて起床時間や食事時間を遅らせている。また、生活リハビリやレクリエーションへの参加もその方の希望を聞いて尊重している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で洋服を選んで頂いたり、レクリエーションのネイルサロンでは好きなカラーで爪のおしゃれを楽しんでいる。定期訪問の理美容ではその方の希望に合わせカット、パーマ、毛染め等もしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	配食サービスを利用しているが、利用者の嚥下状態やアレルギー等に合わせ、代替えや食事形態を変えている。季節を感じてもらえるような炊き込みご飯や行事食を作ったりして利用者の楽しみに繋げている。食器洗いや食器拭き等利用者と一緒にしている。	法人のセントラルキッチンからの配食を活用し、ご飯と汁物は事業所で用意している。季節の食材を使った彩りの良い優しい味付け、豊富な品数の食事は利用者の満足度も高い。誕生会の特別食や行事食も楽しんでいる。生活のリズムを大切に、夕食は18時からとしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	管理栄養士による栄養の管理や言語聴覚士と連携を図りながら、状態に合わせた食形態の提供をしている。また家族に協力していただき、本人の好きな飲み物を持参していただき、水分量の確保をしている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	朝、昼、夕の歯磨きを出来るところは自分でして頂き、職員が仕上げ磨きをしながら口腔内のチェックもしている。異常がある時は家族に相談し歯科受診していただいている。家族が希望されて定期的に歯科往診していただく方もいる。		

自己	外部	項 目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を基にし、各人の排泄パターンを把握。失敗やおムツの使用を減らし、気持ち良く過ごせるように努めている。また、介入時は羞恥心に配慮している。	個々の排泄パターンを把握し、声掛けとトイレ誘導をしているが、タイミングが合わない時は誘導時間の調整を重ね、失敗を減らしている。トイレに行くことを拒否する人のために、便器横に興味を示す絵を貼るなどの工夫もある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	起床時に牛乳、朝食時にヨーグルトを提供し、排便が出やすいように工夫している。各担当が主となり、食事、水分の摂取状況を踏まえ排便がスムーズになるように主治医と相談している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴が楽しみと思えるように、本人の思いを大切にしつつ一緒に入浴する人や、浴室の環境作りにも配慮している。その日の本人の健康状態や思い、気分を聞きながら、提供日を考慮している。	入浴は週2回を基本に支援している。1階のデイサービスと浴室を共有している。脱衣室や浴室は広い。複数での入浴も出来、チェア浴や一人でゆっくり入るなど利用者の希望に応じて入浴支援をしている。入浴前のバイタルチェックで体調管理し、拒否の人には無理強いせず変更することもある。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	家事作業や、体操、レクリエーションで心地よく疲れ安眠に繋がる様に支援している。その日の体調や状態に合わせてベッドでの休養やソファ休養を取り入れている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬局より薬を受け取った際には薬情ファイルを見て変更がないか確認を行い、職員間で情報共有している。服薬時間の変更や臨時薬が出た時には変更内容を薬箱に貼り、服薬前に確認するようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	本人の生活歴を基に強みを生かした役割を提案。本人が複数の中から選んで自ら行動できるように環境を整え、楽しみながら行える雰囲気作りを心掛けている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍のため外出制限もあり、思うように出かけられないが、少人数でのドライブや日光浴を兼ねたお地蔵さん参り等、外気に触れる機会を作っている。	敷地内に安置されている地蔵参り、花壇の花の生育を見たり、テラスでの外気浴、少人数のドライブに出かけるなどで気分転換を図っている。毎日のルーティーンになっているラジオ体操やホール内を行き来することで筋力低下予防に繋げている。	

岐阜県 グループホーム もやいの家 瑞穂

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	コロナ禍の為、現在は中止しているが、地域行事や喫茶レクに参加した際は本人のお小遣いから支払いをしている。家族に確認しながら本人に必要な物品をお小遣いから購入している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	施設から出す家族宛ての手紙に本人のコメントを書いてもらい同封している。 コロナ禍で面会制限もあり、web面会も実施している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	木目調の落ち着いた造りになっている。窓辺にソファを設置し、太陽の光を浴びながら、利用者同士が談笑できる空間作りをしている。花壇に咲いた季節の花を利用者と一緒に生けたり、こいのぼりやひな人形、壁画など季節を感じられる環境作りをしている。	フロアの中央にキッチンがあり、複数のテーブルが配置され、好きな場所で食事ができる。畳コーナーはちゃぶ台や和ダンスを配置し、足を伸ばして落ち着ける。窓から外の田園風景を眺めることもできるが、住宅が建ち並び、ブラインドで目隠ししている。置物、作品、花など季節感ある環境となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	皆で集えるリビングの他、一人で過ごせるサロンもあり、その時の気分によって使い分けができるようになっている。家族と面会が出来た時は、サロンで一緒にお茶を飲みながらくつろげる環境作りをしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入所時に自宅で使用していた馴染みのタンスや椅子等を持参していただき、居室づくりの協力を得ている。家族の写真や小物等を飾り、安心できる環境作りをしている。	居室の入口には、個々に暖簾を掛け、ドアを開けた時に中が丸見えにならないよう配慮している。窓下に作り付けの棚があり、写真や小物を飾り、テーブル代わりに使える。ポータブルトイレは家具調の物を選び、トイレとわからない気配りもある。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々の居室に近い洗面所に口腔ケアセットを準備し、自身で歯磨きに行ったり、食堂の席に自分の座布団をしいて席がわかるように工夫している。		